

〔書評〕

長谷川成一著

『へ郷土歴史シリーズvol.6』津軽為信

―戦国を駆け抜ける鬚殿と呼ばれた初代藩主―

小田桐睦弥

一 郷土の英雄としての津軽為信像と実像

津軽為信ほど津軽弘前の人々に深く敬慕されている武将を私は知らない。今年リニューアルオープンする弘前文化センター正面入口前には、為信の銅像が弘前城を見据えている。戦前までは弘前城本丸にあった銅像は、山崎朝雲（一八六七―一九五四）に制作が依頼されたもので、明治三十九年（一九〇六）九月、津軽為信三〇〇年忌を期して弘前全市を挙げて藩祖三百年記念祭が挙行された際に企画されたものである（完成は明治四十二年一月）。この銅像は、第二次世界大戦の金属供出により撤去され、多くの市民に惜しまれながら「出陣」した。鎧武者、大槍万字の陣棋、旗差物、菅笠袴姿の供出関係者など八〇〇人を従えて弘前駅まで行軍したのだという。為信像は列車で秋田県の小坂銅山に送られた^①。現在の位置に銅像が再建されたのは平成十六年（二〇〇四）のことである。

為信は令和と元号が変わった現在においても、こどもたちや若者の間でも知名度が高く、戦国武将を戦わせるゲームなどにも登場し、津軽の

夏の風物詩ねぶた祭りでも、絵の題材として奮闘するその姿を描かれることも多い。また、出身地とされる岩手県久慈市では、地元出身の偉人とされており、久慈秋祭りには為信の山車が出るそうだ。

さて、本書の筆者である長谷川成一氏によって為信論が展開されたのは一九八〇年代のことである。「文禄・慶長期津軽氏の復元的考察^②」において、為信の名護屋在陣や、関ヶ原参陣、上方とのかかわりについてなど多岐にわたる事実を明らかにされた。また、「津軽為信論―津軽為信と全国政権―^③」と題して、前田利家が為信を評した「表裏仁」という文言を紹介し、これは必ずしも良い表現ではなく、むしろ極めて良くないものであったとしている。この中で、長谷川氏が指摘しておられるとおり、弘前藩において為信の死後、イデオロギー的な側面で活用すべく、その理想人物化や神格化が図られた。こうして形成された為信の「津軽一統志」などに見られる智仁勇兼備の人物で、領民からは親のごとく慕われるような、謂わば虚像のようなものが作り上げられ、今日の為信像につながっているであろう。

これに対し、史料記述に基づいて為信の動向を追っていくと、激動で苛烈な時代を生き抜いたその実像が描き出されるのである。長谷川氏は、『近世国家と東北大名』（吉川弘文館、一九九八年）において、統一政権とのかかわりを大きく取り上げられ、北の視点から近世領主権力の確立について論じられた。ここでは、鷹献上についても細かく検討が加えられ、鷹輸送へ日本海沿岸の大名らが動員されたことも指摘された。

また、同氏の監修された『青森県史』『新編弘前市史』などの自治体史でも津軽為信の実像が県民や市民にもわかりやすく示されてきた。^④

二 本書の構成と特徴

本書は弘前市立博物館「郷土歴史シリーズ」の六冊目で、藩主をタイトルに据えたものの中では、四代藩主津軽信政、二代藩主津軽信枚に続く三冊目である。博物館での一般読者への販売ということを念頭に置いて、平易で分かりやすい文章で書かれている。さらに、十七頁という限られた紙面の中で、十分に為信の魅力を伝えている。しかも、専門性の高い読者層も十分に満足できる読みごたえがある。それは、前節で述べたこれまでの為信論を、筆者自身がまとめ、その為信研究のエッセンスが凝縮されており、史資料に基づいた正確な為信の実像を描き出しているからに他ならない。

本書の構成は次のとおりである。

一 生い立ちと津軽掌握にいたる経過

南津軽の掌握／浪岡城攻略／天正十年～同十三年に至る経過
／アイヌとの抗争／北国海運への連結

二 統一政権への接触

大宝寺氏との提携／豊臣政権への接続／年代比定の変更／南部氏の動向と新たな見解／湊・檜山合戦／惣無事令の伝達・違反

三 奥羽日の本仕置と為信

小田原への出仕／宇都宮における仕置／会津における仕置／

一揆鎮圧と領地安堵／九戸一揆と再仕置／豊臣政権への鷹献上／堀越城への移転と伏見城下の津軽屋敷／肥前名護屋へ出陣／「誓紙一巻」

四 徳川政権下の為信

徳川氏との交接／公家勢力との付き合い／領内支配に着手／高岡への移転を企図／新参家臣の召し抱え／死去と跡目をめぐる争い

おわりに

海外からの証言／ユニークな活躍／統一政権への臣従と困難の克服

三 本書の内容

「一 生い立ちと津軽掌握にいたる経過」では、為信の生い立ちについて、津軽側と南部側の史料において記述内容に齟齬が見られることに触れ、近年の研究では南部側の記述がやや史実に近いとしている。

津軽地域では、天文二年（一五三三）に「津軽弓矢」（南部氏への土豪層の反乱）が発生したが、南部氏はこれを鎮圧すると、南部高信を津軽郡代として石川城に配置した。また、この頃に南部氏一門の大浦氏が「大浦ノ屋形」と呼ばれる勢力となり、為信に続く大浦氏の祖型を形成しつつあった。津軽地方においても、この時期に戦国時代に突入したことが示され、その後、元亀年間（一五七〇年代）に南部家中の内紛を好機と、為信は反旗を翻したのだという。南部氏が手立てを講じられない

ままた、為信の反乱は拡大を続けた。為信が勢力を拡大できた理由として、筆者は二つの理由を挙げている。一つは、出羽の安東氏や庄内の大寶寺氏と誼を通じることによって南部氏を牽制したこと、いま一つは大浦氏譜代の家臣たちのほかに安東氏・南部氏の信仰によって浪人化した比内・鹿角（秋田県北秋田郡・鹿角郡）の領主層、東国・北陸・畿内近国から移住してきた武士たちを、出自を問わず家臣団に組み込み、高い戦闘力を身に着けたことだと指摘する。

しかし、天正六年（一五七八）、為信が浪岡城を攻略したことで、事態が一変した。北畠氏と安東氏は古くから密接な関係にあったためである。南部氏からの独立の過程で良好な関係を築いてきた安東氏との関係は悪化し、安東氏は津軽侵攻を開始する。安東愛季は六羽川の戦いなどで為信を窮地に追い込んだが、ついに浪岡城を回復させることはできなかった。天正十年に至ると、三戸南部家を継いだ南部信直は弟の政信を浪岡城に入部させて津軽郡代とした。為信はこれまでに獲得した南津軽の領地を失ったと考えられ、筆者は安東氏との戦いという苦境の中で南部氏の軍門に降ることを余儀なくされ、和約を結んだ可能性があるという。しかしこれで済まないのが為信であった。安東氏が大宝寺氏や浅利氏を攻めると、為信は大宝寺氏や浅利氏を支援する動きを見せ、北奥羽の混乱に乗じて南部信直の動向をにらみ、失地回復に乗り出したのである。

ここでは、アイヌとの抗争「蝦夷荒」についても取り上げ、為信のアイヌとの抗争は、岩木川の西側、主に鼻和郡・西浜を中心に展開したのに対し、南部氏との抗争が岩木川の東側、主に平賀郡（岩木川上流から

弘前市・黒石市南部）ついで浪岡などの田舎郡（津軽半島から青森湾・津軽平野にかけての地域）で繰り広げられたとまとめられている。

また、天正六年の津軽侵攻に際し、安東愛季は夷島の蠣崎季広に支援を要請しているのだが、その蠣崎氏が津軽への上陸地とした鱒ヶ沢の地を、為信はアイヌ鎮圧を通じて確保し、十三湊を介した中世日本海交易とは別の角度から、新たな日本海交易の体制へ参加する道を開いたのだという。「津軽一統志」には、越後の弥彦（新潟県西蒲原郡弥彦村）は重要な地点なので城郭を築きたいとして、弥彦神社の別当社家を領内に招致して築城に必要な資金や物資を提供したと見える。筆者は、日本海航路への活路を見出した為信が、北国海運への足掛かりとなる拠点の建設を目論んだことが興味深いと述べている。

「一 統一政権への接触」では、為信の初期の統一政権への接触の立ちを立したのが、大宝寺武藤氏であったと指摘、天正初年ころには海路によって交流を開始していたという。その後、越後の上杉景勝が豊臣政権と本格的に提携を結ぶと、景勝は出羽・奥州・佐渡への取り次ぎを任され、奥羽の大名らは景勝の仲介をもって豊臣政権との折衝を行う必要があったのである。

さて、本書の中で最も注目すべきなのが豊臣秀吉から為信に宛てた朱印状および判物の年代比定である。これまで、金子拓氏により、年代がもう少しさかのぼるのではないかと考えが示されていたが、筆者は、これに基づき従来天正十七年（一五八七）十二月二十四日と推定されてきた「南部右京亮宛秀吉朱印状」を同十四年十二月二十四日、天正十八年正月十六日とされてきた「津軽左京亮宛秀吉判物」は同十四年正月十

六日と比定された。為信の統一政権への接触は従来の見解から実に三年から四年も早まることになる。こうして考えれば、為信の動きは南部信直が前田利家に使者・北信愛を派遣して豊臣政権との接触を図った時期と何ら遜色のない機敏な行動をとっていたことになるという。越後の上杉景勝と秀吉を取り次いだ木村清久は大宝寺氏やその後見の本庄氏ともつながりを持っていた。筆者は、為信が大宝寺氏と軍事同盟を結ぶ関係にあったことを考えれば、日本海航路を通じた秀吉と為信の関係は我々が想像する以上に短かったのではないかと指摘する。

天正十七年、安東氏を二分した湊安東氏と檜山安東氏に、南部氏や為信の支援を得た由利衆ら加わり、南部信直はこれを好機とし比内を制圧した。「湊・檜山合戦」である。これは、安東実季（檜山安東氏）側の勝利に終わったが、この戦いそのものが惣無事令（豊臣政権による職権的な広域平和）違反に問われることになった。関東・奥羽における領主間戦争は私戦とみなされ、違反した大名は討伐の対象となっていたからである。ただ、湊・檜山合戦は惣無事令に抵触したことは間違いないが、処罰よりは違反にかかわる両者の、豊臣政権による調停に重点があったのではないかとしている。⁶⁾

「三 奥羽日の本仕置と為信」では、豊臣政権による奥羽日の本仕置の内容について、第一に知行没収と知行宛行、第二に検地に基づく大名領の整備と秀吉直轄地の設定・確保、第三に人返しと刀狩りに基づく身分制の画定などであったと述べ、小田原参陣の状況を紹介している。また、従来小田原参陣が豊臣政権による領地安堵の必須条件と言われてきたが、近年、小田原参陣は領地安堵の決定的な条件ではなかったことが

分かってきたといい、その意義は大小名たちの出仕確認と、それによる知行安堵の了解にあったとしている。⁷⁾

会津仕置では、伊達氏・最上氏・南部氏の足弱衆差上が行われ、知行安堵・宛行が決定した。津軽氏については、天正十八年末に足弱衆差上が行われ、最上氏を除く出羽国の大小名、もしくは北部日本海沿岸の大小名衆とともに「隣郡衆」として動員されるようになったという。

会津仕置を終えた秀吉が帰京すると、検地の徹底化と城破り、足弱衆の上洛、刀狩りなどの仕置の方針に反発して、陸奥・出羽両国の国人衆が各地で反対の一揆を起こした。陸奥国では大崎・葛西、和賀・稗貫、出羽国では仙北・由利・庄内の一揆が勃発した。

出羽国の一揆は十八年末にはほぼ鎮圧され、津軽氏を含めた北部日本海沿岸の大小名たちは足弱衆を連れて上洛し、領知安堵の朱印状を秀吉から下付された。筆者によれば、為信の下付された領知朱印状は現在のところ確認されていないが、拝領したことは間違いないという。彼らの領内には例外なく領知高の三分の一の秀吉直轄地が設定された。為信は津軽領四万五千石のうち自領として三万石を拝領し一万五千石が秀吉直轄地となった。

陸奥国では天正十九年になっても大崎・葛西一揆が鎮圧されず、南部信直も和賀・稗貫一揆を潰滅させることができずにいた。それどころか、反乱は南部領一円に広がりを見せ、ついには北奥最大の一揆である九戸一揆が勃発した。これは豊臣政権の統一事業に対する強烈な抵抗であった。豊臣政権は六万余りの軍勢を動員し、九戸には奥羽の大名衆に加え、蠣崎氏が夷島からアイヌを引き連れて参陣した。為信をはじめ奥羽の大

名衆にとって九戸一揆への出陣は、前年の検地によって実施された領知安堵の領知高に基づいて、統一政権から軍役が発動された最初のケースだった。この動員は朝鮮出兵へ向けてその動員体制が作動するか確認の意味もあったという。

また、天正十九年十月晦日と推定される秀吉朱印状（国文学研究資料館蔵津軽家文書）を、為信が津軽の鷹を上方へ献上するの、その道筋にあたる日本海側の主要な宿泊地において鷹餌の給与と道中の賄いを援助するよう命じたものだと紹介している。為信は、織田信雄や豊臣秀次ら上方の有力人物たちに鷹を献上して接触を図り、豊臣政権内で大名としての地位を固めていったと考えられる。同様に夷島の蠣崎氏も鷹献上を下命されると、ここに鷹献上のシステムが完成し、これは基本的に徳川政権にも引き継がれた。

津軽領内では文禄三年（一五九四）、鼻和郡大浦から平賀郡堀越へ、居城の移転がなされた。時期を同じくして、為信と息子の信枚は豊臣政権から完成間近の伏見城下に屋敷を与えられ、「伏見城下絵図」（福岡市博物館蔵）には諸国の大名が集められ多くの武家屋敷が軒を連ねる大城下町が描かれている。

天正二十年（文禄元年、一五九二）正月、秀吉は九州・中国・四国の諸大名に朝鮮渡海の出陣命令を下した。徳川家康のもとに属した東国の大名たちは、京で落ち合うと兵庫から船で名護屋に着陣した。津軽家の陣屋は名護屋城のすぐ西隣に設置され、他大名の陣屋の配置から見て豊臣政権が日本北端の大名家をいかに位置付けたか、今後研究の余地があるという。当初は朝鮮半島を破竹の勢いで席卷した秀吉の軍勢は、翌

文禄二年に至り形勢不利となっていた。秀吉は講和にも乗り出し、五月には朝鮮奉行の小西行長らに伴われて、明側が仕立てた偽の使節が名護屋に到着した。ここで秀吉は、名護屋在陣の大名・武将ら一二〇名に対して使節に無礼を働くことを禁じる誓約書「誓紙一卷」（東京国立博物館蔵）に署名させた。ここに残る為信の花押は現在確実に確認できる史料のうち最も古いものである。

「四 徳川政権下の為信」では、為信が徳川家康と初めて接触した時期について、確実な史料で判明するのは豊臣政権においてであると示した。朝鮮出兵に際して、肥前名護屋は全国の大名たちが参陣して名護屋城を中心とした一大城下町を形成しており、ここでは、盛んに陣屋外交が展開された。為信は家康を通じて南部・秋田両氏との和解を望んだほかに、積極的に家康に接近したという。

為信の長子信建は鷹献上を通じて関ヶ原合戦以前に家康に接近を図っている（「津軽信建宛徳川家康書状」国文学研究資料館蔵津軽家文書）。為信の関ヶ原参陣については、慶長五年（一六〇〇）八月十九日付「津軽右京宛徳川秀忠書状」（弘前市立博物館蔵）において、家康の出馬次第出陣するように命じられた。さらに、家康の養女で二代藩主津軽信枚に嫁いだ満天姫が輿入れの際に持参したと言われる「関ヶ原合戦図屏風」（「津軽屏風」とも。大阪歴史博物館蔵）に津軽氏のもの可能性が高い卍の旗指物が描かれていることから、参陣の事実を補完されている。関ヶ原合戦の功により、津軽氏は津軽領四万五千石と飛び地の上野国勢多郡大館（群馬県太田市）に二千石、合せて四万七千石の領知安堵がなされた。また、為信は近世初頭から五撰家筆頭の近衛家と関係を深め、

慶長十一年（一六〇六）には近衛家から「忠功」を称えられて「藤」の一字を下賜され藤原姓を名乗る榮に浴したという（『京都愛宕山教学院祐海書牒』国文学研究資料館蔵津軽家文書）。

また、筆者は関ヶ原の戦いのあと、為信は新たな支配体制を構築して領内統治に着手しようと考えたことは間違いないとしている。関ヶ原合戦への参陣中に、尾崎・板垣・多田の三重臣が謀反を起こし、堀越城はあっさり陥落したからである。城内に重臣の屋敷があり、百姓・町人らも城郭に立ち入ることが簡単であったことなどを理由とし、堀越城は防御機能に重大な欠陥があったことが露呈した。こうして、新たな居城の建設を考え始めたと思われる為信は、慶長八年（一六〇三）、高岡（弘前の古名）の地に町屋派立を行った。しかし、為信はこの城の完成を見ることなく京都で果てた。幕藩体制の中の弘前藩と言う藩国家を構築するために広く人材を集め、実務能力に長けた新参のテクノラートによる新政を試みたが、これは為信を古くから支えてきた普代家臣層に不満を抱かせたようで、為信の死去後は跡目をめぐって普代層と新参衆が激突する騒動が発生した（大光寺の乱）。

「おわりに」では、再び祐海の手紙を引用し、「異域・遠島」まで武勇がとどろくほどであったと評されたことを示した。また、イエズス会の年報に為信はキリシタンになる決心をしたが、帰国の命が出てそれが叶わなかったと記されており、息子たちにも入信を進め、信杖は実際にキリシタンになったことも指摘している。奥羽地方においてキリシタン大名となったのは信杖のみであり、西国の大名たちと違い当時であっても稀な存在であった。さらに、理由は不明としながらも、伏見作事用杉板

の搬出に関する軍役不履行による処罰の形跡が見えず、豊臣政権の重要人物との交渉で何らかの形で宥免された可能性を示唆する。

筆者は為信の度重なる危機を乗り切る度量と才能に加えて、行動の背景には生き残りをかけた緻密な計算が働いていたのではないかと、
「新たな為信像を構築していただければ」と結んでいる。

ここまで、本書の内容について簡単に紹介してきたが、ぜひ皆様には本書をお手に取ってご覧いただきたい。これまでで最も分かりやすく、最も実像に近い津軽為信を知ることができる。

註

- (1) 荒井悦郎「津軽の街と風景九〇 戦争で消えた為信像」（『陸奥新報』平成三十年四月三十日朝刊）。
- (2) 長谷川成一編『津軽藩の基礎的研究』（国書刊行会、一九八四年）。
- (3) 弘前市教育委員会編『弘前の文化財津軽藩初期文書集成』（弘前市教育委員会、一九八八年）。
- (4) 『新編弘前市史 通史編一 古代・中世』（弘前市、二〇〇三年）、『青森県史 通史編一 原始・古代・中世』（青森県、二〇一八年）。そのほかに、長谷川成一ほか『青森県の歴史』（山川出版社、二〇〇〇年）、『日本歴史叢書 弘前藩』（吉川弘文館、二〇〇四年）などにも、為信に関する記述がある。
- (5) 『青森県史 通史編一 原始・古代・中世』（青森県、二〇一八年）第九章第三節二 北奥と豊臣政権。
- (6) 同前。
- (7) 小林清治『奥羽仕置の構造』（吉川弘文館、二〇〇三年）。

【謝辞】本書は弘前市立博物館の郷土歴史シリーズの六冊目として、長谷川成一先生に書き下ろしていただいたものです。津軽為信に関する、先生のこれまでのご研究を惜しげもなく詰め込んだ、非常に充実したものでありながら、驚くほどコンパクトにまとめていただきました。お忙しい中、本書の執筆にご尽力賜りましたことを感謝申し上げますとともに、先生の今後ますますのご健勝をお祈りして、謝辞に代えさせていただきます。

(A4判、十七頁、弘前市立博物館、二〇二二年九月発行、五〇〇円(税込))

(おだぎり・むつみ 弘前市立博物館学芸員)